Center for Redevelopment of Pollution-damaged Areas in JAPAN

Libella

No.111
（隔月1日、年6回発行）

2009年
11月

つるむde

いっしょに「つるみ」ませんか？――「水都大阪2009」をきっかけに自転車をキーワードにみんながつるみながら大阪のまちを元気にしようと結成された「つるむde大阪」。自転車大好き、ちょっと興味あり、様々な人が集まって、8月22日から10月12日までの「水都」期間中に、セミナー展示＋ライブ、ツアー＋レンタサイクルなど多彩でユニークな行事を浪速のまちで展開しました。

同プロジェクトチームには、あおぞら財団も参加。まちを楽しみ・人とまちをつむぐ自転車の役割、持続可能な社会を考えるきっかけにしようと取り組みました。

（写真はクルーズ&サイクリング～船と自転車を使ったまちめぐりを楽しむ参加者　9月13日道頓堀で）

●目次

特集　公害を伝えるスタディツアー

「緊張感のある信頼関係」に基づく神岡鉱業への訪問　高田　研　2
公害地域の今を伝えるスタディツアー2009　林　美帆　4
スタディツアーの感想
白戸渓子　松ヶ平あかね　澤田由貴乃　黄瀬ありさ　6

〈シリアからの手紙〉④レイシュ?　中野　貴行　3
西淀川交通まちづくり意見交換会の取り組み　石塚　裕子　8
被害者336人の“生の声”
あおぞらプロジェクト大阪の「ぜん息被害実態調査」報告集　上田　敏幸　9
〈リレーエッセー〉八ッ場ダムにおもうこと　田尻　悠太　10
〈忙中一筆〉生半可な意志と立場からではなく…　榎田　基明　12

特集　公害を伝えるスタディツアー

あおぞら財団の新しい試みとして、この夏にスタディツアーを実施しました。場所はイタイイタイ病の現場となった富山です。2府13県からの大学生、教員、研究者、NPO職員など45名が参加しました。（地球環境基金助成事業）

「緊張感のある信頼関係」に基づく神岡鉱業への訪問

高田　研

神岡は岐阜県の最北端にあり、深い谷合にある鉱山の町です。最盛期には全国から４０００人もの労働者を集め、谷間にある町とは別に、映画館から散髪屋まで丘の上にもう一つの町が作られて賑わいました。現在は２００１年に亜鉛，鉛の採鉱を完全にやめ、鉛リサイクルと亜鉛精製部門を残し、社員約５００名と縮小されております。しかし社員の地元率は7割～8割と神岡町のくらしを支える企業であることは今も変わりません。

立場を越えて「出会う」こと

今回の聞取りでお世話になりました神岡工業株式会社の担当者は神岡町のご出身。三井金属鉱業神岡事業所に入社されたのは１９７６年で、私が中学校の教師に採用され、加害企業である三井金属鉱業のことを「公害教育」の中で子どもたちに初めて教え始めた年でもありますから、個人的にはこの立場の違いに複雑な気持ちがいたします。１９７６年というと住民原告が四大公害裁判の先頭を切って勝訴から4年。発生源対策も成果を上げ始めたころですが、当時はまだ公害問題とその対策については担当部署しか分からない状態であり、当時はイタイイタイ病の加害企業に入社したという意識はなかったといわれます。

近藤団長からの宿題

２００８年8月の「第37回立ち入り調査」にあおぞら財団の一員として同行させていただきました。その調査の最後に開かれた質疑の場面で、被害団体協議会から同年12月に開催予定の「提訴40周年の集い」に神岡鉱業の渋江隆雄社長が招待されます。イタイイタイ病の歴史上に残る場面です。12月の集いで近藤忠孝弁護団長は「今や無公害を宣言した企業とは同士だ。」と挨拶。これに対して渋江社長は「今や社員には無公害企業へのＤＮＡが組み込まれている」と語られたそうです。（復元ニュース第76号）

「第37回立ち入り調査」を終えて帰りのバスの車中。近藤忠孝さんからは「長い闘いの歴史が汚染の農地の復元事業の完了（２０１０）とともに風化して行く危機感がある。そしてこれからは次の世代にどのように引き渡して行くのかが問題になっている。」という環境教育への期待の言葉をいただきました。今回のツアーはそのときいただいた宿題でもあります。

「再生」から「継承」へ

現在、運動のステージは裁判という「たたかい」から神通川の水質浄化、汚染農地復元という「再生」を経て、県立の資料館を建設し、次世代に「継承」していくという場面にさしかかっております。

このような地域の文脈の中に若い大学生たちを送り、その空気を身体で感じ、状況に向き合ってもらう事が今回のスタディツアーの最も大きなねらいです。

2泊3日という短い期間では有りましたが、そこでお聞きした地域の皆さんからのメッセージを受け止めて問題意識を深めてもらう学びのプロセスを作るために、それぞれの取材チームで地域に提案を残すという課題を出しました。

提案が学びの成果ではなく、そのプロセスにおいて個々の学生が対岸から問題を受け止めるのではなく「身の内で考える」ことにあります。

地域の文脈を読む

対策協議会長の高木勲寛さんは参加者による発表会において

「加害企業がずっと不幸を背負って、そして被害者がずっとその被害者意識を持っていたらそれは大変不幸じゃないですか：その事が、私たちはパーフェクトに１００パーセント出来るとは思っておりませんですが、そういうところもあるんだと、皆さんはそういう地域に今来られたんだと。そのことを踏まえてみなさんは勉強されたんだと、有る意味しっかりとらえて頂きたいと私は思いました。…班毎のプレゼンテーターに対する聞き方、それはすばらしかったです。ここに来られた方々は一方的に話を聞いて行かれるだけですが、今日の皆さ

スタディツアー最終日のふりかえり（2009年８月６日、清流会館）

ん、３日間のここにおいでの皆さんはすばらしいものをこの清流会館に残していただいたと思います。」と講評されました。

高木さんが受け入れに際して最も心配されていたのがここまで積み上げて来た地域の文脈を理解して聞き取りを行ってくれるのかということでした。中でも神岡鉱業の訪問に関して最も危惧されておりました。しかし聞き取りにあたった学生は予想以上に慎重に言葉を選んで質疑を行いました。

「緊張感ある信頼関係」

大阪市立大学院生である伊東千秋さんの感想を紹介します。

「地域住民と神岡鉱業の40年以上に及ぶ戦いの歳月の中で、地域の住民の方々のさまざまな想いが込められ、重厚で強靭な意志を貫かれた方だけが使える言葉ではないでしょうか。…いくつかの質問を用意しておりましたが、「緊張感のある信頼関係」ということばを耳にし、その言葉の持つ意味や重さを知り、軽々しくつけ焼き刃のような質問をすることは出来ませんでした。「緊張感のある信頼関係」ということばが、すべての答えになっていたような気がしました。」

緊張感に満ちた現実の中に身をおいた経験こそ、彼らの最も学びではなかったかと考えております。

（たかだ　けん　都留文科大学教授、財団理事）

シリアからの手紙

中野 貴行

④ レイシュ？

僕がよく使う言葉は、「アッサラームアライクム」と「シュクラン」、そして「レイシュ？」だ。アッサラームアライクムは直訳すれば「あなたの上に平穏を」。出会ったときの挨拶に、「こんにちは」と同じように使う。シュクランは「ありがとう」。レイシュは「なぜ？」である。話の中に気になることがあれば、「レイシュ？」とすかさず尋ねる。

日本に居たとき、「なぜ？」はよく使う言葉じゃなかった。これはシリアで学んだことだ。生活や考え方を知りたいと、現地の人たちと話しているうちに、いつの間にか僕が質問攻めに遭っている。「宗教は何だ？」「なぜ火葬をするんだ？」「どうして日本の新年は、〝西暦〟の１月１日なんだ？」その場で理由を考えて説明し、家に帰ってから日本の文化や歴史を大慌てで勉強した。

「にしたって、皆、『なぜ？』って聞き過ぎじゃない？」活動を共にするシリア人の友人に泣きついた。すると「だって、聞いてみないと分からないじゃないか」とあっけらかんと返事をされた。文化も歴史も違う。知らない事だらけだ。だから聞かなきゃわからない。「！」である。こうして僕の口癖も「レイシュ？」になった。

宗教学校の先生と活動中

海外で暮らす。それは、その国だけでなく、自分の国のことを知る機会である。同時に、日本の文化や習慣を知らない自分に気付く（相手は僕の「レイシュ」に即答するのに！）。それは僕だけじゃないだろう。あまりに多くの日本人が「そんなもんだ」と受け流している。どうして、こうなったんだろう？子ども達の好奇心が薄れてしまったのか。大人達が答える責任感を失ったせいか。文化を伝え残すコミュニティがなくなったためか。レイシュ？

（なかの・たかゆき　青年海外協力隊19年４次シリア村落開発普及員）

伝えるスタディツアー 2009

～富山・イタイイタイ病の地を訪ねて～（2009年8月4日～6日）を開催しました

	夜
	グループ分け
	ヒアリング結果のまとめ提案作業

ツアーでは参加者が４グループに分かれて、運動団体や、被害者家族、農家、行政、弁護士、工場関係者の聞き取りを行い、最終日に発表を行いました。今回は１年目ということもあり、荒削りでハードなプログラムとなりましたが、充実した３日間となりました。一部分ですが報告します。ちなみに、このスタディツアーは３ヵ年実施し、成果をまとめる予定です。

１日目

高木勲寛氏

青島恵子氏

大阪と山梨からのバス２台が昼過ぎに富山市婦中町の清流会館に到着。清流会館は、イタイイタイ病裁判の賠償金で建てられた会館です。会議室や展示室を備えています。

一日目はイタイイタイ病の診断・治療に長く携わってきている萩野病院の青島恵子医師とイタイイタイ病対策協議会会長の高木勲寛氏からイタイイタイ病に関する概要や地域の状況などを伺いました。

夜は、宿泊地のいこいの村富山で二日目のグループわけを実施し、その後は、参加者の親交を深める懇親会を開催しました。

グループ分けの様子

２日目

A班

B班

朝からグループに分かれて、２時間ずつヒアリング（右表）を行いました。その後、A・B・D班は富山県農林水産部の宝田氏の解説のもと、土壌復元現場の見学をしました。現場への行き帰りにバスの車中から高木勲寛氏の案内があり、婦中町の汚染田は一部が宅地や商業地、公共施設に転換している現場も見学しました。

夜は班ごとに発表内容を考えます。徹夜した班もありました。

グループ分け

A班	弁護団	水谷敏彦氏 坂本義夫氏	裁判の経過と現状、証言集づくり
	北日本放送	数家直樹氏	地元マスコミの立場から
B班	婦中行政センター（富山市）	清水昌昭氏 佐藤秀夫氏 佐野浩之氏	地元行政の立場から
	イタイイタイ病対策協議会	高木良信氏	被害者の家族の立場から
C班	イタイイタイ病対策協議会	江添久明氏	被害者運動について
	神岡鉱業	尾家直人氏 森田　保氏	企業の立場から
D班	富山県農林水産部	宝田　研氏	土壌復元事業について
	宮川鉱害対策協議会	澤井和夫氏	自主復元事業について

公害地域のいまを

スタディツアー日程

	午前	午後
1日目 8/4（火）	バスで移動・現地に集合	イタイイタイ病の概要をうかがう
2日目 8/5（水）	グループに分かれてヒアリング	現地見学
3日目 8/6（木）	発表・交流会	解散

グループごとに発表、提案

3日目

清流会館にて発表会を行いました。内容はヒアリング内容と提案についてです。短い時間しかヒアリングできませんでしたが、外からの目線で見えてきたことをお伝えしました。発表会には澤井和夫氏が来場され、「立派な総括を聞いて、早く公害を撲滅し、公害のない日本にしなくてはと感じた。また私は農家なので、これからもおいしいお米を作ってみなさんに食べてほしいと思っている。」とコメントされました。参加者の発表は稚拙かもしれませんが、この3日間で感じた驚きや考えたこと、見えてきた課題を伝えたいという真剣なものでした。これらの想いを受けて、高木勲寛氏からも「受け入れてよかった」といっていただき、ほっと胸をなでおろしました。

帰りもバス二台に分乗して、関東と関西にそれぞれが帰路に着きました。今後はスタディツアーで学んだことを、みんなに知ってもらえるように活動していこうと考えています。

（林美帆：財団研究員）

土壌復元の現場で宝田さんから説明を受ける

提案内容（一部分）

A班	イ病を負の遺産から未来への成功事例として未来に伝えるために資料館（多機能な観点から言えばセンター）の構想
B班	懇談会の定期開催　現状・感情を共有 住民の意思の反映による認定基準の改定
C班	後継者育成のための対策協議会と行政の連携による田植え体験 公害の伝え方を五感に訴えるものにし、若者の参加への機会を増やす
D班	災害によるリスクを予測して対応策をたてる。 土壌回復マニュアルの作成し、自主復元事業を若い人に伝える。 米のブランド化（美田もちもち米）

グループ内で発表内容を話し合っています

スタディツアーの感想

参加者の皆さんが書いてくれた感想は、どれも内容が豊富で面白いものばかりでした。その中から学生の感想を中心に一部紹介します。

気が付いたら涙が出ていました

白戸　渓子
（都留文科大学大学院　社会学地域社会研究専攻）

ツアーに参加するまでは、公害について、そしてイタイイタイ病に対して『知らなければいけないこと』というとらえ方が自分の中にありました。（中略）江添さんのお話を聞く前まではこの公害に対するとらえ方が先行して、お話を聞き、見学をしていました。江添さんのお話を聞いた後は全く違う感覚で学ぶことができました。江添さんの声、お話する様子、お話の内容全てから吸収するもの、学ぶものがあると感じました。本当に感覚的にスイッチが入ったというか、全く違う感覚が江添さんのお話を聞いている中で私の中に生まれました。お話を聞く前まであった『知らなければいけないこと』という感覚から、『知ることができてよかったこと』という感じの変化で、とても自分の中にすっと入ってくる感覚になり、気が付いたら涙が出ていました。今まで持っていた唯一のイタイイタイ病に対するイメージの「患者さんは痛みがつらかったのだろうな」というイメージから、患者さんの周りの家族や近所の人、地域の人、集まってきた人……と教科書の中からは知ることのできなかった世界が広がりました。何よりも江添さんに出会い、直接お話を聞けたことをとてもうれしく感じました。そのため『知ることができてよかった』という感覚になったのではないかと思っています。

知らなかった自分がとても恥ずかしい

澤田由貴乃
（都留文科大学社会学科）

私は富山県出身なのですが、授業で習った程度にしかイタイイタイ病について知りませんでした。そして、ツアーに参加するまではイタイイタイ病は過去のものだと思っていました。（中略）土壌復元事業は主に県で行われていたのですが、例外として住民の方々が復元事業を行った地域もあったようです。その自主復元事業に取り組んだ澤井和夫さんにもお話をお聞きすることができました。自主復元事業の行われた宮川地区の方々がなぜ自分たちで復元事業を行おうと考えたかというと、美しい水田を取り戻し、早くおいしいお米を作りたいと考えたからだそうです。このような理由で始められた自主復元事業でしたが、やはりその道のりは困難であったようです。例えば、この自主復元事業では穴を掘ってその中に汚染された土を埋め、その上に汚染されていない土をのせる方法がとられたようですが、業者にお願いしたところ、廃材や産業廃棄物を埋められるといったこともあったそうです。このような困難を乗り越え、平成7年に宮川地区の全ての地域の自主土壌復元事業は完了しました。その後は、良い土のおかげで、復元事業を行う以前よりもおいしいお米を採ることができるようになったそうです。県庁の宝田さんや自主復元事業に関わった澤井さんのお話をお聞きし、そのような努力がずっと為されていたことを全く知らなかった自分がとても恥ずかく思いました。そして、富山県の人々はもっとイタイイタイ病に対しての認識を深めるべきだと感じました。

イ病風化防げ
勉強ツアー
学生ら45人参加

地元紙に掲載されました
「読売新聞」2009年8月7日

日本の上手く行った例は海外へと発信すべき

松ヶ平あかね
（京都精華大学）

私は今回この三日間で強く思ったのは「伝えたい気持ちがあるのに伝えられていない」と言う事だ。関係者の皆さんから話を聞いているとこのままイタイイタイ病を風化させたくは無いと思って伝えたいのだが、上手く伝えられない、という風に私には取れた。それは公害病の存在を忘れ去られるだけではなく、富山にある土壌汚染復興や、神岡工業との今上手く保たれている関係性、そういう良い物が存在していると思っているからだ。富山の人から見たら「負の遺産」で消してしまいたいものだろうけれど、私は自分達の生活を安定させるだけでは無く、世界各地で同じような汚染された地域への手助けとして手を伸ばさなければならないのではないだろうかと思う。公害地域としてとても良い傾向にあるのだからこそ、日本の中で留めておくのは残念だ。今は中国や東南アジア等、南半球の国々が段々と工業化が進み、公害が多発している。自分達だけが満足のいく穏やかな生活を送るのは私はおかしいと思っている。だからこそ、日本の上手く行った例は海外へと向けて発信すべきだし、助けると言う意味でも必要なのではないだろうかと個人的に思っている。伝えたいと願うのならば、私は必ず自ら伝えていかねばならないのではないかと思っている。

ツアー参加者全員集合

受信する私たちが常に敏感になって

黄瀬ありさ
（同志社女子大学）

イタイイタイ病の歴史や被害に関する写真などが展示されている清流会館。ところが今、資金不足のためにその清流会館が存続の危機にある、ということもお話していただきました。（中略）資料館の実現に向けて全力で伝えようとしている高木さんでさえも、この「伝える」ことがどうしてこんなに難しいと思うのだろうかと疑問を感じました。その理由のひとつに、受信する側の準備が出来ていないということがあげられると思います。発信者の伝えたいことを、私たちは本当に受け止められているのか、拾い落していないだろうか、いつでもそう自分に問いながら受信することが今必要なのかもしれません。発信しようとしている人がいるのに、受信する私たちが常に敏感になってアンテナを張っていなければ、すべて無駄になってしまう。次につなげるということは、伝える人と聞く人の姿勢が同じになって、初めてそこで成立しうるものなのだと思いました。問題意識があれば情報は自然と入って来るし、またそれを促すために「また同じことが起こるかもしれない」という危機感がやはり必要だと改めて思いました。次につなげる発信源として清流会館の公立化が早く実現すること切望します。私もこのスタディーツアーで経験したことを通じて、受信者から発信者のうちのひとりへと変わっていけたらいいなという思いです。

西淀川交通まちづくり意見交換会の取り組み

買い物に、学校や職場に、友達に会いに、病院に…と安全に快適に生活するためには、必ず移動が必要になります。移動を支える交通は市民生活の中で最も身近なまちづくりの課題の一つです。しかし、市民自身が交通の施策について真剣に考える場は、そう多くはないのではないでしょうか？

そこで、市民自身がわがまちの交通について議論をする場として「西淀川交通まちづくり意見交換会」が開催されました。

西淀川交通まちづくり意見交換会とは

意見交換会は、「西淀川・交通まちづくりビジョン研究会（以下、研究会とする）」によって運営されました。研究会は、大阪大学・京都大学・あおぞら財団の協働によって構成されており、住友財団の環境研究助成を受けて進められています。

研究会では、これからの時代には、地域に暮らす人たちが話しあいながら、まちづくりの方向性を決めていくことが重要だと考えています。このため、西淀川がもっと住み続けたいまちとなるように、専門家の知恵を借りながら、まちづくりの方向性を話す場を設けようということになりました。

意見交換会の流れ

意見交換会に先立ち、研究会では、西淀川区にお住まいの方２０００名を無作為抽出し、アンケート調査を実施しました。このアンケート調査において、「意見交換会」への参加意思をおたずねし、「参加してみたい」と回答のあった方を対象に、参加をお願いしました。

意見交換会は下記のテーマで合計３回開催され、延べ56名の区民の方にご参加いただきました。

第１回（６月21日）「西淀川、こんなまちに住みたいな。夢を語ろう！」
第２回（７月26日）「難問解決？専門家にヒント、アイデアの源を聴く」
第３回（８月30日）「西淀川での実践にむけて！」

西淀川区民が考える「交通まちづくり」

第１回では「10年後の西淀川～こんなまちなら住みたいな～」と題して語り合った結果、概ね８つの視点でまちづくりをしていきたいということが確認されました。例えば「人と環境にやさしい交通が充実したまちに」、「緑・水辺が美しい、生き物豊かなまちに」、「まちの資源（歴史・自然）を活かしたまちに」などです。

この夢を実現するための交通施策について、大阪大学大学院松村暢彦准教授（第２回）と、同大学大学院猪井博登助教（第３回）から提案があり、検討する上での視点などについてもアドバイスを受けました。

その結果、西淀川を〝自転車のまち〟として新しいまちのイメージの構築すること、自転車に乗れない高齢者や障がい者の移動手段を確保し、誰もがいつまでも安心して暮らせる持続可能なまちとすること、それには区民自らがアクションをおこす必要があることが住民提案としてまとめられました。

今回の取り組みを通じて、市民が集まり、意見を交換し、一緒に施策を考えていく必要性や大切さが確認されました。また、参加者の全員が、地域の問題を住民参加で考える会議に引き続き参加したいという意向を持っています。これは、今後の西淀川のまちづくりにおいて、大きな〝地域力〟になると感じています。

「西淀川交通まちづくりビジョン」公開討論会を開催します！

意見交換会の取り組み報告と、住民提案を踏まえて専門家がまとめた「（仮称）西淀川交通まちづくりビジョン」の発表の場を設け、区民、交通まちづくりの関係者、専門家による公開討論会を行います。

住民自身が討議し、交通まちづくり施策を考える意味や効果は？

人と環境にやさしい交通のあり方は？

持続可能なまちづくりを進めていく上での住民参加のあり方は？

などについて、討論していきたいと考えています。ぜひ皆さんご参加ください。

開催日：平成21年12月19日（土）13時30分～16時
場　所：西栄寺（大阪市西淀川区御幣島１―６―17）

（石塚裕子：財団特別研究員）

被害者336人の〝生の声〟

あおぞらプロジェクト大阪の「ぜん息被害実態調査」報告集

「せめて医療費だけでも無料になれば…」――大阪ぜん息被害実態調査報告集からは、呼吸器の病気で苦しむ被害者たちの痛切な声が聞こえてくる。同書をまとめたあおぞらプロジェクト大阪は、大気汚染によるぜん息等の健康被害者への救済制度づくりと新たな健康被害の原因物質といわれているPM2.5（微小粒子状物質）の環境基準の早期設定と規制の強化を求めて2008年11月に発足。「ぜん息被害実態調査」に取り組んでいた。

浮かび上がる健康被害

調査は25万枚のアンケート付きチラシを大阪府内に配布、詳細調査への協力に同意した人に調査票を届けて集計・解析した。

336人のアンケートはがきを地域別にみると、大阪市内が259人、その他の府内は77人。かつての公害指定地域の居住者が95・5％を占めた。性別は男性が少し多く（52・7％）、平均年齢は男性57・7歳、女性59・3歳、55歳から84歳が全体の6割を占めている。

調査からは健康状態も浮かび上がった。「かぜをひいた時、ゼイゼイとかヒューヒューという」が212人（63・1％）、「セキがよく出る」「タンがよく出る」がともに194人（57・7％）、カゼをひいていないのに、ゼイゼイとかヒューヒューという」が166人（49・4％）、「息が急に苦しくなる発作を起こしたことがある」が、154人（67・0％）、カゼを「ひきやすい」と答えた人が107人（46・5％）、年間4回以上カゼをひく人が半数近くもいることがわかった。病名では「気管支ぜん息」が172人（51・2％）「慢性気管支炎」54人（16・1％）、「肺気腫」33人（9・8％）だった。

「1日も早く医療費助成がなりますように」

調査を通して110人から、健康と生活の実態、切実な要望が「私のひとこと」として寄せられた。

●すぐカゼはひくし、カゼをひくとすぐわるくなりしんどい思いをします。カゼをひかないよう、かなり努力をしています。（うがい、マスク、吸入など）将来も在宅酸素をしなければならなくなるかもと思うと不安です。現在は少しましなのですが。

（大正区65歳　女性）

●25歳の息子ですが，小児ぜん息がそのまま大人になっても続き、毎月の受診に時間とお金が負担となっています。また発作を抑えていても気管支系の病気（カゼ等）にかかりやすい。これからの人生を思うと不安です。

（羽曳野市25歳の男性の母親）

●一度発作を起こし病院へ行くと7～8千円の医療費がかかるので我慢してこじらせて、結局入院で多額の医療費と仕事も休んで上下莫大な損をして後悔ばかり。生活苦に強いられ大変困っています。どうか1日も早く医療費助成がなりますようにお願いします。

（西区61歳　男性）

被害者救済制度の創設を

報告書は「今回の実態調査で明らかになったこと」として次の6点をあげた。

①公害は「終わった」どころか、引き続き深刻な問題として継続している

②公害疾患は小児で終わるものではない。大阪府全域に広がっている。その生活はしんどくてつらい

③未認定・未救済の公害患者は〝負の連鎖〟の中にある

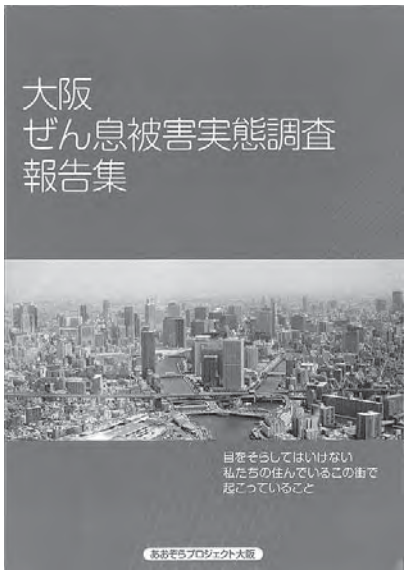
④「せめて医療費だけでも無料になれば」は、未認定・未救済患者の切実な願い

⑤大気汚染によるぜん息のない社会を実現する最大のカギは大気環境の改善、きれいな空気

⑥公害患者・慢性疾患患者・ハンディキャップを持った人が安心して働ける社会づくりを

そして、「府民・市民が安心して暮らせるために」、①大気汚染による公害健康被害者の医療費助成制度の創設②微小粒子状物質（PM2.5）の環境基準の策定と規制の具体化③ハンディキャップを持って人たちが安心して働ける「社会的ルール」の確立など3点を国、自治体、道路管理者、自動車メーカーに要求している。

（上田敏幸：財団総務）



大阪ぜん息被害実態調査報告集
発行：あおぞらプロジェクト大阪
頒価：300円（別に送料が必要です）
申し込みは当財団まで（担当：眞鍋）

ほっとニュース

インターン生のお兄さんお姉さんと一緒に…セミ調べ・ハゼ釣り大会開催

8月9月の夏休みを利用して、大学生がインターン実習にやってきます。今年は8人が集まりました。毎年恒例となったセミのぬけがら調べでも、大学生は大活躍。グループのリーダーとして子供たちと一緒にぬけがらを集め、セミ新聞づくりの指導にあたりました。

さて、今年度の調査の結果ですが、クマゼミのぬけがら1390個、クマゼミよりも自然度の高い場所に棲むアブラゼミは26個でした。今年で8回目になりますが、アブラゼミが10個以上見つかったのは、今年が初めてです。

また10月10日に行われた「淀川親子ハゼ釣り大会」にもインターン生の有志が参加。運営を手伝ってくれました。ハゼ釣り大会では、講師の西口先生がなんと43㎝のチヌを釣り上げました。

インターン生の若い力をとりいれながら、イベントを進化させていきたいものです。

セミのぬけがら調べ、
大学生のお兄さんお姉さんと子どもたちです

西成高校「チャレンジ人権総合学習」「生きる権利の侵害」公害を学ぶ授業を実施

西成高校で行われている「チャレンジ人権総合学習」の一環で、環境問題をテーマとする授業の企画・運営をあおぞら財団でお手伝いしました。授業は9月11日、18日、25日の3日間おこなわれ、20名の生徒が参加しました。

1日目は大阪の大気汚染公害に関する講義と大正区と西淀川区の公害患者と家族の会による語り部、2日目は西成地域のフィールドワーク調査、3日目は二酸化窒素の簡易測定とまとめのワークショップという流れで実施しました。公害という「生きる権利の侵害」を学び、自分たちができることは何かを生徒それぞれが考えることをねらいとしています。

環境問題というと温暖化問題など範囲が広くとらえられ、被害の実態がみえにくくなりがちです。公害を学ぶことで、生徒たちは生活と環境問題、被害のつながりを実感したようです。

おねがいとおしらせ

リベラへのご意見・ご要望または投稿をお待ちしています。また、メール通信「あおぞらEXPRESS」を開設しています。ぜひご利用下さい。配信を希望される方は

http://groups.yahoo.co.jp/group/aozora-mail/

から登録できます。

リレーエッセー

ハッ場ダムにおもうこと

田尻　悠太

ちかごろダムが話題になっている。なかでもひときわ物議を醸しているのが、群馬県の吾妻川で建設工事が進行中の八ッ場ダムだ。重力式コンクリートダム、堤の高さは131メートル。JR、国道、県道の付け替え、水没する川原湯温泉の移設、軟弱地盤ゆえの地滑り対策など、工事の予定はもりだくさんだ。新政権発足により、この税金もりだくさんなダムにも待ったがかかった。完成させたほうが安いとか、いやいや中止したほうが安いとか、いろいろな議論がされているが、そもそもこのダムの計画が持ち上がったのは1952年という。なぜこんなにも長い間着工されなかったのか。

出典 Wikimedia Project／作者 Skyriser

もともと、吾妻川は厄介な特徴を持つ川だった。この川の上流には酸性泉で有名な名湯草津温泉がある。吾妻川の水は強酸性となり、コンクリートの橋は腐食してしまう。こんな川にダムを作れるわけがない。まずこの強酸性の水を中和することが、流域の生活にとっても重要だった。1964年には品木ダムと中和施設が完成した。河川の水を石灰で中和し、品木ダムで堆積させ、上澄みを下流に流すという事業は成功し、吾妻川流域は魚が住めるまでになった。ここまでは、流域の生活を豊かにするための公共事業だったように思える。しかしこれをうけ1967年、八ッ場ダムの建設は可能と判断され、建設計画が再始動した。

水没地域の住民は猛烈な反対運動を行っていた。しかし長引く交渉の間にも、住民の多くが町外へと移転していった。ダム計画によって地域そのものが骨抜きにされたことが、この問題をより深刻にしている。残された住民は、ダムを受け入れることでかつての生活を取り戻すことに希望を見出すしかなかったのだ。新政権のダム中止に対し、地元住民が激昂するのも頷ける。私たちが「お金」の問題として片付けようとしているならなおさら……。

（たじり・ゆうた　エコミューズ資料整理スタッフ）

*このコーナーでは、あおぞら財団で一緒に活動するスタッフの近況報告をかねた一言を紹介します。

お知らせ

矢倉海岸定例探鳥会と100回記念イベント

（日本野鳥の会大阪支部との共催）

日時　12月5日（土）午前9時30分～午後11時30分頃

集合　阪神電鉄西大阪線「福」駅改札口　午前9時30分

場所　矢倉緑地公園

＊終了後、あおぞらビルにて「100回記念イベント」を開催します。

あおぞら財団「ボランティア」の日

日時　12月4日（金）、2010年1月7日（金）

場所　あおぞら財団事務所内（例外あり）

時間　午前9時30分～午後5時30分

（応相談）

まちのお医者さんになろう2009

空気の汚れを調べてみよう

（NO_2簡易測定）

日時　12月26日（土）午前10時集合

場所　西淀川区民会館

＊事前に測定用カプセルを配布

お礼

（2009年8月・9月　敬称略）

●寄附・寄贈者

井上有一、柏熊泰之、金城学院中学校、窪田圭多、交通エコロジー・モビリティ財団、佐賀　朝、星陵高等学校、土佐和久、中島晃、畑明朗、益尾宏之、村松和美、森山正和、龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コース

●お助けボランティア参加者

青野翔太、浅井真二、池田風弥、魚住佳宏、太田庸介、柏原和平、佐々木悠太、谷畔翼、谷本章和

●インターン実習

井上瑠衣（滋賀県立大学3回生）、大山良輔（近畿大学3回生）、岡田大地（桃山学院大学3回生）、荻野由紀（大阪経済大学2回生）、川淵絵里子（奈良女子大学3回生）、田中淑恵（桃山学院大学3回生）、藤原正規（近畿大学3回生）、宮路崇之（大阪経済大学2回生）

事務局日誌

8月

1日（土）　JICA大阪国際教育セミナー（講師:林･眞鍋）
3日（月）　拡大事務局会議
　西淀川地域再生研究会
　広報会議
4日（火）　公害地域のいまを伝えるスタディツアー2009～イタイイタイ病の現地を訪ねて～（～6日）
8日（土）　いしかわ地球市民の会第三回参加型学習セミナー（講師:林）
　「地域のチカラ」市民フォーラムin東淀川（パネラー:藤江）
10日（月）　大阪市立大学教員免許更新講座（講師:林）
17日（月）　事務局会議
18日（火）　大野川緑陰道路でセミのぬけがら調べ
19日（水）　COOP自然派ピュア大阪フードマイレージ（講師:眞鍋、林）
20日（木）　てづくりせっけん教室
　ESD会議
21日（金）　資料館定例会議
　資料館スタッフ会議
22日（土）　京都府温暖化防止活動推進センターOJT研修（講師:林）
　エコ･安全ドライブ講習会（東淀川）
　水都大阪2009「つるむde大阪～チャリンコでつながるまちづくり」キックオフイベント（-10/12）
25日（火）　事務局会議
　自転車寺子屋
　ECOまちネットワーク･よどがわニュースレター編集会議
26日（水）　ECOまちネットワーク･よどがわニュースレター編集会議
　エコ･安全ドライブ講習会（シンワアクティブ）
　地域資料シンポ実行委員会　拡大委員会
27日（木）　子どもの参画べんきょう会
　西淀病院地域診断フィールドワーク患者さんヒアリング
　あおぞらプロジェクト幹事会
28日（金）　大阪府温暖化防止活動推進センター研修（講師:林）
29日（土）　貴志川線ツアー（道路環境市民塾として参加）
30日（日）　西淀川交通まちづくり意見交換会
31日（月）　事務局会議
　イレッサ裁判

9月

1日（火）　西淀川図書館展示「西淀川菜の花プロジェクト2009」（～10月末まで）
2日（水）　中国視察（～7日まで）
3日（木）　大阪経済大学ボランティア受入れ
4日（金）　大阪経済大学ボランティア受入れ
5日（土）　探鳥会
6日（日）　松原インターアクトクラブフードマイレージ（講師:林）
8日（火）　事務局会議
9日（水）　あおぞらプロジェクト報告会
　ECOまちネットワーク･よどがわ
11日（金）　佃中学校職場体験事前訪問
　西成高校授業
12日（土）　緑陰道路サロン
13日（日）　シンポジウム 地域資料の保存と活用を考える（第3回）
　ウィズ東淀川（講師:藤江）
　和歌山県温暖化防止活動推進センター講義（講師:林･眞鍋）
14日（月）　道路環境市民塾編集会議
　第38回公害環境デー事務局会議
15日（火）　事務局会議
　あおぞらプロジェクト会議
16日（水）　石川県温暖化防止活動推進センター講義（講師:林）
17日（木）　石川県温暖化防止活動推進センター講義（講師:林）
　第38回公害環境デー実行委員会
　淀川勤労者厚生協会09年度新入職員地域診断フィールドワーク発表会（参加）
18日（金）　西成高校授業
　佃中学校職場体験受入れ
　資料館定例会議
19日（土）　大阪府温暖化防止活動推進員OJT研修
　緑の募金（関西スーパー大和田店前）
　東淀川区民祭
20日（日）　西成高校授業
25日（金）　スタディツアー統括会議
29日（火）　事務局会議

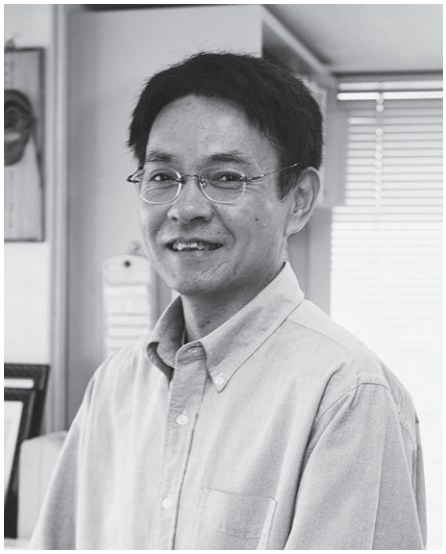
【編集後記】　法律家をめざす司法修習生 11 人の研修を受け入れた。阪神なんば線・出来島駅→出来島小学校・国道 43 号…過去と現在の公害の現場をたどって、デイサービスセンター・あおぞら苑へ。待ち受けていた2人の公害患者の体験に触れ、大野川緑陰道路をへてあおぞら財団へ。公害患者との意見交換では、「被害の事実を知らなかった自分が恥ずかしい」のことばが2人から出ました。今回特集のイタイイタイ病スタディーツアーの学生といい、法律家の卵といい、その探求心と知的好奇心の高さに感服です。（T）

『Libella』No.111　2009年11月号（隔月1日、年6回発行）
発行所　（財）公害地域再生センター（あおぞら財団）
編集人　上田敏幸
大阪市西淀川区千舟１－１－１　あおぞらビル４階
Tel.06-6475-8885 Fax.06-6478-5885
http://www.aozora.or.jp/
E-Mail webmaster@aozora.or.jp
印刷所　あゆみコーポレーション
定　価　一部４００円（郵送料込み）
会員の購読料は会費に含まれています。
郵便振替口座　00960-9-124893（加入者名　あおぞら財団）
乱丁・落丁はお取り替えします。本紙掲載記事の無断転載を禁じます。

Bonchu Ippitsu
一忙筆中

えのきだ もとあき
榎田 基明

1963年福島県白河市生まれ。関西大学法学部及び文学部史学・地理学科卒、同大学院文学研究科単位取得中退。佛教大学社会福祉学部非常勤講師、交通権学会理事、まちづくりと交通研究室代表、京の道と交通を考えるネットワーク事務局長、道路全国連幹事。財団特別研究員。



生半可な意志と立場からではなく、生活を賭け真剣に関わらなければならない

道路問題
――生活を賭けた闘いは続く

先日、横浜で道路全国連交流集会が開かれ、各地で高速道路や大規模な幹線道路の建設・計画と闘う41団体２００名が集まった。道路公害反対運動全国交流集会として始まったこの集会は今年で35回目の開催となった。

一般には既に過去のものと受け止められている道路公害であるが、道路と自動車交通に起因する問題は現在も進行中であり、健康被害や交通事故に留まらず住環境破壊や地域経済・文化、公共交通、地球温暖化、人の精神構造にまで影響の及ぶ範囲は拡大し続けている。だからこそ他分野も含めた運動連帯の必要性は益々高まっており、道路全国連の組織活動も強化しなければならなくなっている。残念ながら運動などせずに住民が平穏無事に暮らせる社会は未だ見えない。

今こそ、チェンジ！
クルマ優先の道路行政

「権利＝法の目標は平和であり、そのための手段は闘争である。権利＝法が不法による侵害を予想してこれに対抗しなければならないかぎり、権利＝法にとって闘争が不要になることはない」（イェーリング『権利のための闘争』）のである。

「今こそ、チェンジ！クルマ優先の道路行政」をテーマに人と環境に優しい交通政策への転換を見据えた今年の集会は、政権交代を好機と見た攻めの運動をどう展開していくかを中心に例年に増して熱の入った議論となった。毎回の真剣かつ熱心な議論には敬服するばかりだが、そのエネルギーはどこから湧いてくるのだろうか。それは自らの生活を賭けて闘っているからこそ生まれてくるに違いない。道路建設を進める職能意識を持たない行政、ゼネコンやコンサルタントとの大きな違いである。

町並み保存運動に
関わって以来20年

この運動に当事者でない私はどう関わったればよいのか。技術や知識を提供するだけではただのお手伝いである。生半可な意志と立場からではなく、生活を賭け真剣に関わらなければならない。京都・伏見での町並み保存運動に関わって以来20年の中で学び確信に近づいていることである。

この国土の装景家たちは
この野の福祉のために
まさしく身をばかけねばならぬ

――宮澤賢治「装景手記」より